

康成と虚子についての一考察

——「わが愛する文章 愛子抄」を視点として——

序

山田吉郎

太平洋戦争後の川端文学は、昭和二十四年に連載が開始される『千羽鶴』『山の音』によって本格的な展開がなされてゆくと行ってよいであろうが、それに先立ち昭和二十年後半から二十三年へかけての作家川端の動向が、その準備期として重い意味をもっているように考えられる。『雪国』の完結や「哀愁」に見られる古典回帰への志向、『少年』『再婚者』の連載など多彩な活動が視野にはいつてくるが、本稿では、そうした活動の一つとして、昭和二十二年から二十三年へかけて雑誌『白鳥』（大地書房刊）に連載された「わが愛する文章」の中の一つに注目したいと思う。この「わが愛する文章」は雑誌『白鳥』の昭和二十二年一月号から二十三年七月号まで断続的に十一回にわたって連載されたものであるが、それぞれ毎回川端が心寄せる文章を引用して紹介し、そのちに川端による「解説」が付されている。その取り上げられた文章は、島崎藤村の随筆、『更級日記』、志賀直哉の随筆、小学五年生の綴り方の

文章、『方丈記』、高浜虚子の小説、菊池寛の小説、東下り三篇（『伊勢物語』『平家物語』『太平記』）、横光利一の小説、内田誠の随筆、『源氏物語』などであるが、この中の第六回（『白鳥』昭和二十三年一月号）に掲載された高浜虚子作品とその解説が、戦後の川端文学の歩みの中で一定の意味を有しているかのように推測され、取り上げることになった。

一

高浜虚子は、周知のように正岡子規から雑誌『ホトトギス』を継承し、日本近代俳句の発展に尽力した人物である。雑誌『ホトトギス』は子規の提唱した写生を受け継ぎ、俳句・散文（小説）を中心に幅広い活動を展開している。夏目漱石の『吾輩は猫である』が『ホトトギス』に掲載され人気を博したことは知られているが、このほか伊藤左千夫『野菊の墓』、夏目漱石『坊っちゃん』、鈴木三重吉『千鳥』、徳田秋声『南国』、田山花袋『椿の花』、森鷗外『護持院原の敵討』をはじめ多くの散文作品が掲載された。高浜虚子自身も一時期小説の方に重点を置いて活動していた時期があったが、やがて俳壇に復帰し、「客観写生」「花鳥諷詠」を掲げて伝統に根ざした定型・有季の俳句運動を推進した。

こうした高浜虚子についての川端の直接的な言及は多くはないが、先述のように戦後になると高い評価を示した文獻も見られるようになる。

ちなみに中学時代の川端康成の日記・手帖類（『川端康成全集』補卷一所収）には、「写生」や「写生文」の語は見られ、また景色を写生したと思われる文章や俳句の試作が認められる。

虚子についての直接的言及は、太平洋戦争後の文芸時評において見られる。それは『人間』昭和二十二年四月号の

「創作短評」欄に発表されたものであるが、冒頭に述べた「わが愛する文章」へと繋がる論及として位置づけられるものである。以下に前半部を引いてみる。¹⁾

高浜虚子氏の「虹」（苦楽）と「愛居」（小説と読物）とを一月の雑誌で読み、えらいものだと思つた。胸の澄む文章である。位の高い作品とはかういふのだらう。近ごろの塵を払はれた。若くては書けさうにない。

聞くところによると、虚子氏は北陸旅行中この「虹」を携へ、会があれば読み、読んで直されたといふ。虚子氏らの俳句の集まりにはさういふこともあるのかもしれない。「ホトトギス」の同人のあひだには、子規の生前から、自作の文章を朗読して批評し合ふ会があり、その会は子規の死後も続き、明治三十七年十二月には漱石が虚子氏のすすめによつて「吾輩は猫である」の第一章を出品したと、虚子氏は「漱石と私」に書いてゐられる。それから四五十年のあひだに虚子氏は折々自作の文章を朗読されたことだらう。さう思へる確かで明らかかな言葉とひびきが「虹」や「愛居」にもあるやうだ。またそれから四五十年の虚子氏の写生文がこれらの作に行き着いたのだ。

ここには、高浜虚子作品に対する作家川端の並々ならぬ傾倒が見てとれよう。加えて、通常の作家たちの文章作法とは異なり、自作の写生文を同人の前で朗読する形で推敲を深めてゆくという、正岡子規以来の文章作法に依拠するあり方への敬意が込められている。右の批評文の中で、「胸の澄む文章である。位の高い作品とはかういふのだらう。近ごろの塵を払はれた。若くては書けさうにない。」という一節はとくに注目したい。これは単に文章の技巧を論じたものではなく、老境において至りついた清澄、熟達の作家の境地をも捉えようとした言である。

このように述べた川端は、時評の後半部において、『虹』も『愛居』も病弱の若い弟子を旅の道中に見舞ふ健康な文章である。この文章から今日の作家を連想するなら志賀直哉氏であらうかと思ふ」と記し、敬意に充ちた分析を行

っている。「病弱の若い弟子を旅の道中に見舞ふ」という作品の内容については後に述べるが、いずれにしてもこの時評に示された格別な虚子への傾倒が、この後の川端の執筆活動へと繋がっていったようである。

さて、前掲の「創作短評」(『人間』昭和二十二年四月)以降の川端の虚子への言及は、以下のように見られる。

・「わが愛する文章 愛子抄」(『白鳥』昭和二十三年一月)

・『定本虚子全集』「推薦文」(昭和二十三年九月、創元社)

・高浜虚子『虹・椿子物語他三篇』「解説」(昭和三十一年十一月、角川文庫)

これらのうち、「わが愛する文章 愛子抄」については詳しく論じたので後にゆずり、先に『定本虚子全集』「推薦文」と角川文庫『虹・椿子物語他三篇』「解説」については言及する。この二篇はいずれも短文で、ほぼ同様の内容のものである。まず『定本虚子全集』「推薦文」を見ておこう。

子規や漱石は勿論大きい仕事をしたが、早く斃れたといふ憾みはその作物にも感じられる。まことに天器を大成されたのは虚子氏である。虚子氏の近作を見ても、日本的芸術のゆきつく典型の一つとして、今日には比類のない宝としなければなるまい。明治以後の作家で最も円熟の境に至り得た人であらう。

俳句のことは深く知らないが、虚子氏の散文、殊に小品や小説は予て深く尊敬してゐる。高く、正しく、確かな文章といふ点でも、虚子氏の後の作家では志賀直哉氏を見るくらゐのものである。しかも老来「虹」などにいよいよ匂ふ若さと艶とは世阿弥などの言ふまことの「花」であらうか。

推薦文の前半部を引いた。ここでは、先の「創作短評」の内容を受け継ぎながら、高浜虚子の文学の完成された姿に世阿弥のいう「花」の美を見ようとしている。そしてそこに、虚子の最近作である『虹』を具体例として指し示しているのである。

全集推薦文であることを考慮しても、ここに見られる川端の虚子への傾倒は、やはり尋常のものではないであろう。老境に至りての虚子の高い完成の姿と、それが日本文学の伝統にしかと繋がっているとの認識がここには見られる。したがって、こうした川端の高浜虚子への思いが川端自らの創作にどのような刺激を与えたのかが関心事となってくるのである。

なお、先に言及した角川文庫の『虹・椿子物語他三篇』の「解説」も、前半部は前掲の『定本虚子全集』推薦文と全く同じである。後半部もほぼ同じであるが、文庫の解説文では末尾の全集推薦の辞が削られている。

二一

さて、「わが愛する文章」の第六回（『白鳥』昭和二十三年一月）は、「愛子抄 高浜虚子」と銘打たれて四章から成る虚子の作品が掲載され、その後川端のかなり詳しい「解説」が付されている。

「愛子抄」という表題については、「解説」の冒頭で次のように記されている。

「愛子抄」とは、私が作者にことわりなくつけた題名で、愛子といふ人を書いた高浜虚子氏の三つの作品、「虹」と「愛居」と「音楽は尚ほ続きをり」とから、愛子の姿の鮮明なところ、虚子氏の思ひの高調のところを、これも私が作者にことわりなく抜萃してみたのである。

ここに記されているように、愛子という女性が登場する虚子の連作的な三作品を、川端自らの視点から編集、抄出したのが「愛子抄」なのである。²³少なくともここには、愛子という女性像に対する川端の関心の深さが認められるのではなからうか。

ところで、この「愛子抄」の「解説」文については、川端自筆の原稿が確認されている。現在、大阪の茨木市立川

端康成文学館に所蔵されているが、その原稿を調査する機会があり、以下しばらくその原稿について触れておきたい。平成二十五年度科学研究費助成事業による研究「日本近代文学館他における川端康成・肉筆資料の調査研究」（基盤研究C）、課題番号25370242、研究代表者・片山倫太郎、研究分担者・田村充正・田村嘉勝・福田淳子・山田吉郎、研究協力者・杵渕由香・佐藤翔哉・堀内京、平成二十五年四月より四年間の計画）が行われているが、その調査研究の中で茨木市立川端康成文学館の所蔵資料を調査させていただく機会があった。その折りに閲覧した原稿と、初出誌（『白鳥』昭和二十三年一月号、国立国会図書館蔵）および現在『川端康成全集』第三十二巻に収録されている「解説」をつき合わせてみたい。なお、全集所収本文は、「解題」では「本全集では、発表誌を底本として用ゐ、著者の手許に遺されてゐる発表誌からの切抜を参照して、本文を作成した。」と記されている。以下に異同箇所を指摘してゆきたいが、句読点の有無や仮名遣いの訂正等はいくつかあり、ここでは原則として省略することとする。また、初出誌では虚子作品『音楽は尚ほ続きをり』の題名の漢字・仮名表記に若干の不統一があるが、これも言及にとどめる。本稿ではそれ以外の異同を掲げることとし、便宜上、全集第三十二巻所収の本文の頁に沿う形で記してゆく。

・全集一四九頁四行目

拔萃↑拔萃（初出）・抜粹（原稿）

・同頁一四行目

艶↑艶（初出）・艶えん（原稿）

・同頁一五行目

虚子の近作↑虚子の近作（初出）・虚子氏の近作（原稿）

・一五〇頁二行目

小諸↑小諸こもろ（初出・原稿）

・同頁一〇行目

素晴らしい虹↑素晴らしい虹（初出・原稿）

・同頁一八行目

（改行して）「音楽は尚ほ続きをり」の音楽の主題は虹である。↑（組版の関係で改行かどうかは不明）（初出）・（改行なし）（原稿）

・一五一頁一〇行目

互に頼り頼られて↑互にたより頼られて（初出・原稿）

・同頁一七行目

柏翠位の年輩↑柏翠の年輩（初出）・柏翠位の年輩（原稿）

・一五二頁六行目〜七行目

「愛子の最も好み、喜んだ、先生↓愛子↓私と云つた、つながり」↑「愛子の最も好み、喜んだ、先生↓愛子↓私、と言つた、つながり」（初出・原稿）

・同頁七行目

先生の光の中に↑先生の光のなかに（初出・原稿）

・同頁一一行目

小諸鎌倉をよんだ。また同門の杞陽が↑小諸鎌倉をよんだ。また同門の杞陽が（初出）・小諸、鎌倉をよんだ。また、同の杞陽が（原稿）

康成と虚子についての一考察

以上が全集所収本文と初出誌、原稿との主な異同である。その異同は若干の字句の統一、訂正といったものにとどまっているようで、とくに内容にかかわるような大きな変化はないであろう。あるいは初出誌では特別に著者校正は行われなかった可能性もあろうか。

なお、このほかに自筆原稿において、高浜虚子の作風を形容した表現に改変がなされている部分があり、注目される。それは、愛子を詠んだ虚子の句七句を引用したあとに川端が記した次の一文である。定稿（川端全集）を示す。

老大家の句としては驚くばかり烈輝であり艶麗である。（初出誌『白鳥』も異同なし）

この一文の「烈輝」の箇所について、川端の自筆原稿では初案が「熱烈」となっており、それが抹消され「烈輝」と改められているのである。この箇所は、川端の高浜虚子観を示す重要な部分であり、後に論及することにした。

さて、ここで「愛子抄」の「解説」の内容について具体的に見てゆこう。まず、愛子という女性像について、川端は次のように記している。

虚子の近作はすべて事実ありのままの記録、これら三つの作品も日記風、愛子以外の人物も本名で出てゐる。殊に「音楽は尚ほ続きをり」は年月を明らかにして章を分ち、愛子の死は昭和二十二年四月一日と記されてゐる。（中略）虚子氏が北陸の旅のみちすがら初めて愛子の家をおとづれたのが「虹」、次におとづれたのが「愛居」、そして「音楽は尚ほ続きをり」では、愛子達も昭和二十一年六月に虚子氏の小諸の俳句会に参加し、虚子氏が同年十月三国に愛子の病床を見舞ひ、翌二十二年四月に愛子の臨終や没後の模様を手紙で聞くところまで書かれてゐる。

このように愛子は北陸に住む実在の女性で、高浜虚子の俳句の弟子として虚子と交流をもち、はかなく病で亡くなったのである。さらに留意すべきはその愛子をめぐる人間模様で、後に触れるが川端作品とも一脈の関連があるよう

にも想像される。川端が虚子作品の本文に即しながら、その人間模様を解説した部分を次に引く。

虚子氏と愛子とは師弟のあひだがらだが、やはり虚子門の柏翠と愛子およびその母との三人が「互に頼り頼られて淋しい生活を営」むやうになつた縁因は、「虹」にも「音楽は尚ほ続きをり」にも出てゐる。

「柏翠は鎌倉の七里ヶ浜の鈴木病院に十年間も入院してゐた天涯孤独の人で、其所で矢張り入院して来た愛子とも逢ひ、又愛子のお母さんとも心やすくなつたのである。愛子が柏翠に俳句を学んだのは其頃である。其後愛子は三国に帰り、柏翠は鎌倉と三国を往来し、今は三国に滞留してゐるのである。」（中略）柏翠は以前虚子氏の鎌倉の家に来て、愛子と結婚しようかと思ふこともあるがと言つたけれども、二人とも胸を病んでゐるから、虚子氏にもよく考へてからにしたまへと言はれて、

「『結婚しないことにしませう。其方が結局二人の幸福ですから。』

と言つた。私は今迄私のいふことは何でも正直に守る柏翠であることを知つてゐるので、柏翠のこの言葉に対して、惨酷な申訳の無いことを言つてしまつたやうに覺えた。併し其を又取消す気にもなれなかつた。」

愛子と柏翠とはかういふ愛し方であつた。

虚子も川端も鎌倉住まいであり、また鎌倉七里ヶ浜の病院で虚子門の柏翠と愛子、その母が出会い交流を深めてゆくわけで、川端としても親近感をもつてこの人間模様を受け止めたのではなからうか。さらにこの人間模様が、作家である川端の関心を惹いたとも考えられる。その関心の深さを示すのが、川端自らが「わが愛する文章」において「愛子抄」という表題を新たにつけ虚子作品を再編集した試みであつたと言えよう。

ところで、虚子作品に出てくる愛子と柏翠は、実在の人物である。『定本高浜虚子全集』（毎日新聞社）第十五卷「書簡・資料集」の「後註」によれば、愛子については、「森田愛子（大6〜昭22）福井県生まれ。森田三郎右エ門の

四女。昭和十五年より柏翠の指導で作句。のち柏翠とともに虚子に師事。句集『虹』（共著）。『虹』の主人公。」と記され、柏翠については、「伊藤柏翠（明31）本名勇。東京生まれ。松原地蔵尊、虚子の指導を受けた。『花鳥』主宰。北陸テレビ社長。」と記されている。また、この虚子全集所収の書簡中には、虚子がこの二人のことを小説に書くにあたって配慮、打診をした手紙も見られる。さらに愛子の逝去後、虚子の『虹』がラジオ放送されることになり、柏翠にあてて、

「虹」を四月二十九日四時より四時半迄東京第一放送にて放送する由に候。最早聞くのも厭やと御考かとも存じ候へど、それならば知らしてくれたりよかつたのといはれるかもしれないぬと存じ御報告置候。

お母様よろしく。放送の都合にてお母様のお唄は新橋の名妓であつたメ子といふ今は鎌倉に隠栖してゐる人が河東節の「白鷺」を唄ふといふことです。

という葉書（昭和二十二年四月二十六日付）を送つたりしている。このように高浜虚子は、『虹』が実在の人物を扱つた作品であつただけに相応の配慮を払つていた様子がうかがえるのである。

それでは、川端が心を寄せた「愛子抄」とはどのような作品世界なのであろうか。川端は「解説」で「愛子の姿の鮮明なところ、虚子氏の思ひの高調のところを、これも私が作者にことわりなく抜萃してみたのである。」と述べていたように、その抜粋した部分は作家川端自身がとくに心惹かれた部分でもあるのである。

次に、「愛子抄」から川端自身が注目したであろう場面、描写をいくつか見てゆくことにする。

まず第一に、第一章で「私」や愛子が列車内から虹を見る場面に目を向けたい。

その時ふと見ると、丁度三国の方角に当つて虹が立つてゐるのが目にとまつた。

「虹が立つてゐる。」

と私は其方を指した。愛子も柏翠もお母さんも体をねぢ向けて其方を見た。それは極めて鮮明な虹であつた。其時愛子は独り言のやうに言つた。

「あの虹の橋を渡つて鎌倉へ行くことにしませう。今度虹がたつた時に……」

(中略) 私もそこに立つてゐる虹を見ながら、其上を愛子が渡つて行く姿を想像したりして、
「渡つていらつしやい。杖でもついて」

「ええ杖をつけて……」

愛子は考へ深さうに口を噤んだ。

これはしつとりとした情緒をたたえた、あえかに美しい叙述である。とくに「あの虹の橋を渡つて鎌倉へ行くことにしませう。今度虹がたつた時に……」とつぶやく愛子の言葉は哀切で美しい。このような虹の描写に川端はある程度注目したと考えられる。なぜなら、戦後の川端文学には、『虹いくたび』をはじめ虹に重要な意味を付与して描いた作品がいくつも見られるからである。そうした川端の創作との関連性については後述したい。

第二に注目したいのは、作中の「私」がふと涙を禁じえなくなる愛子とその母の所作である。俳句会が終わつて山中の温泉地で宴会が開かれるが、その宴も半ばになって、愛子の母が唄と踊りを披露する場面がある。後に詳しく触れるので、ここでは母が踊りを披露する場面を短く引く。

其うち誰かがすすめたものであつたか、又自ら進んでやつたものか、お母さんは立上つて踊りはじめた。(中略) ここにも亦昔の名妓の面影を見ることが出来て、私の眼からは涙がこぼれ落ちる許りになつた。(中略)

其時ふと座を立つて其お母さんの後ろに立つたのは愛子であつた。それが亦踊るのであつた。私はあのかぼそい弱々しい愛子がここに現れようとは予期しなかつたので、忽ち胸にこみ上げて来るものがあつた。

ここに見られるような母と娘がひっそりと暮らしながら重なり合うように描かれる構想は、戦後の川端作品にも相似たものが見られるように思われ、とくに戦後の代表作『千羽鶴』に出てくる太田母娘のことが想起されるが、後に詳述したい。

川端が注目した場面として第三に指摘したいのは、虚子が弟子である愛子への思いをいくつかの俳句に詠んだ一節である。

曾て私は愛子が「虹の橋を渡つて鎌倉へ行かう」と言つたことから、虹といふとすぐ愛子を思ひ出すので、小諸にゐて浅間山に虹の立つた時、

浅間かけて虹の立ちたる君知るや

虹立ちて忽ち君の在る如し

虹消えて忽ち君の無き如し

といふ三句を書いて愛子に贈つたことがあつた。其後又小諸に在つて、

虹消えて音楽は尚続きをり

虹消えて小説は尚続きをり

といふ句を作つたが、これも何となく愛子を心に描いてのことであつた。

右の場面に注目した川端には、俳句文芸、虚子俳句についての一定の理解が存したと考えられる。ふり返ってみれば、川端は少年期の茨木中学時代から俳句・短歌の投稿を行っており、また『雪国』の稿を書き継いでいる昭和十年代には「平穏温泉だより」（『文学界』昭和十一年十二月）「信濃の話」（『文藝』昭和十二年十月）などに俳句・俳諧についての言及があり、さらに戦後の自伝とも言える「独影自命」やノーベル賞受賞の際の随筆「秋の野に」（『新潮』昭和四十三年十二月）「夕日野」（『新潮』昭和四十四年一月）、「都のすがた——とどめおかまし」（東山魁夷『京洛四季』「序」、昭和四十四年九月、新潮社）などでは自作の俳句を記してもいる。とくに「独影自命」では、昭和二十八年の一月に裏千家の初釜に招かれた折りに川端自らが俳句を詠んだことに触れ、次のように記している。

十年ぶりくらゐの、絶えて久しい句作だ。

初釜に宗匠還暦の年と言ふ

初釜の床に大き柳枝垂れをり

初釜に二百年なる銀の風爐

初釜の背に大観の富士雲海

初釜の広間家元爛漫と

初釜づくしは素人のつたなさだが、無造作な写生はいささか虚子風であるか。

自らの句作に見られる「無造作な写生」を、川端は「いささか虚子風であるか。」と見なしている。むろんそれほど重い場での発言ではないが、高浜虚子の句風について川端に一定の理解があったことがうかがわれ、それはまた先の「愛子抄」をめぐる注目、論及の中で深められていたのではないかと想像される。

右に述べたように、川端の俳句への関心には相応のものがあり、そうした背景のもとに「愛子抄」中の虚子俳句へ

の注目がなされたと考えられよう。とくに前掲の虚子俳句「虹立ちて忽ち君の在る如し」「虹消えて忽ち君の無き如し」の句はまさに虚子の「無造作」な作風が顕著でありつつあえかな「君」への心情がにじみ出していて、印象深い作である。それとともに、はかなくも断ち切りがたい人への愛憐と虹の形象を重ね合わせたモチーフに、川端文学と繋がるものがあるようにも思われるのである。

以上、川端が注目した「愛子抄」の場面をいくつか取り上げたが、こうした場面をはじめ「愛子抄」では全篇にわたって虚子の愛子への情愛が流露していると言えよう。愛子は虚子の弟子の一人であり、虚子の愛子への思いは俳句の師としての立場からの深い情に充ちている。当然のことながら恋愛感情というものとは異なっている。また、同じ虚子の弟子の一人に柏翠がおり、彼は愛子の家に同居して愛子との結婚も一時は考えていた様子がつづられている。そのような虚子の愛子への情愛には、こまやかでいたわりに充ちたものがある。その点に着目して川端は「愛子抄」の「解説」の末尾で次のように記している。

虚子氏がこの愛子に注いだ愛憐の情は抄出の文章に明らかである。勿論恋愛とは言へないが、老大家の胸にあざやかな虹は立つたのである。さうしてわが国では珍らしい、老大家が若い女を描いた名作が生れたのである。虚子氏は明治七年出生、もう七十歳を越えてゐられる。

ここで川端が述べている「わが国では珍らしい、老大家が若い女を描いた名作が生れた」という捉え方は重要であろう。言うまでもなく『山の音』に代表される戦後の川端文学との関連が浮かび上がってくる。

とくに先に掲げた「解説」の中で注目したいのは、愛子を詠んだ虚子俳句七句（前出の五句のほか「虹の橋渡り交して相見舞ひ」「虹の橋渡り遊ぶも意のままに」の二句を含む）を引用した後に記した川端の感想であり、

老大家の句としては驚くばかり烈輝であり艶麗である。

と記されている。「列輝」「艶麗」の語が川端の見方をよく伝えている。

ところで、先の章で述べたようにこの箇所は、前出の川端自筆原稿では若干の推敲の跡が確認され、初案では、
老大家の句としては驚くばかり熱烈であり艶麗である。

となっている。その文中の「熱烈」が抹消されて、替わって「列輝」の語が据えられたのである。この初案の「熱烈」の語は、相当に直接的な表現であるが、それだけに愛子を詠んだ虚子俳句への川端の驚きと感動を直にあらわしているであろう。そして、この注目は、前述のように戦後の川端文学のいくつかにそのモチーフにおいて繋がるものを有しているのではなからうか。次章では、「わが愛する文章」執筆時に近接して連載がはじまった『千羽鶴』『山の音』『虹いくたび』など戦後の川端作品との関連性に論及することにした。

三

虚子の『虹』『愛居』等に見られる人物構図がとくに重要と思われる。その人物構図においてはおよそ二つの面がある。その一つは、虚子がその場面に接して思わず落涙した愛子とその母の舞う姿であり、一つは虚子の愛子への心づかい、情愛の向け方である。

虚子が落涙し、川端も感動を覚え、「愛子抄」として抄出しコメントを加えた場面は次のようなところである。それは、作中の「私」がふと涙を禁じえなくなる愛子とその母の所作である。俳句会が終わって山中の温泉地で宴会が開かれるが、その宴も半ばになって、愛子の母が唄と踊りを披露する場面がある。

「お慰みに一つ唄はせて貰ひませう。」

さう言つて謡ひはじめた。さびた声で覚えず耳を傾けしめた。この人が三国で鳴らした名妓であつたらうとい

ふことはかねがね想像したところであるが、此の俳句会の一行には今迄は蔭に蔭にと身を置いて、あるかなきかの存在であつたのである。(中略) 私はこの場合この思ひもよらぬ座を引締めた芸の力といふよりもこの思ひもよらぬ私をもてなすための優れた芸に少し眼がしらが熱くなつて来るのを覚えた。

其うち誰かがすすめたものであつたか、又自ら進んでやつたものか、お母さんは立上つて踊りはじめた。(中略) ここにも亦昔の名妓の面影を見ることが出来て、私の眼からは涙がこぼれ落ちる許りになつた。(中略)

其時ふと座を立つて其お母さんの後ろに立つたのは愛子であつた。それが亦踊るのであつた。私はあのかほそい弱々しい愛子がここに現れようとは予期しなかつたので、忽ち胸にこみ上げて来るものがあつた。

私は遂に涙があふれて来た。

ここではかつて名妓であつた愛子の母が、芸を披露し、その母に重なるように「かほそい弱々しい愛子」が母の後に立ち、踊る姿が印象的である。虚子の『虹』の最初の方には、

お父さんは別の大きな家に住まつてゐて、ときどきこのお母さんの家に来るのださうである。私は、

川下の娘の家を訪ふ春の水

といふ句を空想して作つたが、其お父さんのある本家といふのは町の中央にあつて、愛子の家が矢張り川下であつたことを後になつて知つた。

と記されており、愛子とその母がひっそりと暮らしてきた境遇が暗示されている。そうした母の陰で娘がはかなく踊る姿がここには哀切に点描されているのである。この母娘で踊る場面は『虹』の中心をなす場面であり、この場面を目にして視点人物の「私」は涙がどうにも止まらなくなつてしまふ。その重要場面を川端康成は先に述べたように「愛子抄」の中にしかと抽出しているのである。そして、ここに見られるような母と娘がひっそりと暮らしながら重

なり合うように描かれる構想は、戦後の川端作品にも相似のものが見られるように思われる。すでに述べたが、まず想起されるのは昭和二十四年から連載のはじまった『千羽鶴』に出てくる太田母娘のことである。

ここで、『千羽鶴』の世界を見てゆこう。『千羽鶴』の太田夫人は、夫の死後、夫の友人であった三谷と愛人の関係になり、娘の文子と母娘二人暮らしをつづけてゆく。三谷は茶道の世界で有力な後援者であったと思われ、その三谷の庇護を受けるような形で、幼い娘の文子も、文子なりに時折り訪れてくる三谷に心を尽くして接したかのように記されている。やがて三谷が亡くなると、太田夫人は円覚寺の茶会で三谷の息子の菊治に会ったのをきっかけに、三谷父子を同一視したかのように愛恋を深めてゆく。さらに太田夫人が自殺すると、娘の文子もまた菊治に控え目ながら思いを寄せ、また菊治も太田夫人の面影を宿す文子に惹かれてゆくのである。このように、太田夫人と文子は、あたかも二人舞うかのような形で三谷やその息子の菊治の前にあらわれるのである。この薄幸とも言える境遇の中で母娘の影が重なり合うような設定に、虚子の「愛子抄」との一脈の連関があると言えるように思う。

むしろ、虚子作品においてかつて名妓であった母とその病弱な娘が舞う姿は美しく哀切であるのに対し、『千羽鶴』の太田母娘の方には、そうした舞い姿に照応するようなものは直接には見られない。ただ、登場人物と繋がる形での茶道具の存在のかがやきが、「愛子抄」の舞い姿に対応するような形で描かれているとは言えるであろうか。たとえば、『千羽鶴』のほぼ半ば「絵志野」の章に、赤楽・黒楽の筒茶碗をなかだちとして、菊治が太田母娘とのかかわりに思いを馳せる場面がある。太田夫人が亡くなった後、菊治が夫人の家を訪ね、文子もてなす場面である。

文子が茶盆を持つてはいつて来た。

赤楽と黒楽との筒茶碗が盆にのつてゐた。

黒楽の方を菊治の前に出した。(中略)

文子の父が死んで、菊治の父が生きてゐたところ、菊治の父が文子の母のところへ来た時、この一對の楽茶碗が、湯呑代りに使はれたのではなからうか。菊治の父に黒を出し、文子の母は赤で、女夫茶碗としたのではなからうか。(中略)

もしさうだったとすると、それを知つてゐる文子が、菊治のために今この茶碗を出して来たのは、ひどいいたづらなわけだった。

しかし、菊治は思はせぶりの皮肉とも、たくらみとも感じなかつた。

娘らしい単純な感傷と受け取つた。

むしろその感傷は菊治にもしみて来た。

文子も菊治も、文子の母の死につかれてゐて、かういふ異様な感傷にもさからへないのかもしれないが、一對の楽茶碗は菊治に文子と共通の悲しみを深めた。

ここでは、太田夫人と文子、菊治の父と菊治という、親子二代にわたつての世間的には錯雑をはらむ交渉のさまが描かれるに際して、一對の楽茶碗が感傷、悲しみを深めるなかたちとして置かれている。それは茶器を通すことによつて人間模様を象徴化するようなニュアンスがあるであろう。また物語の終わり近く、文子が贈つた志野の水指をめぐつて文子と菊治が話す場面がある。先日差し上げた湯呑みを割つてくれと言う文子に対して菊治が問う場面である。

「最高の物しか、ひとにはやれないといふ……?」

「相手と場合とによりますわ。」

菊治に強くひびいた。

太田夫人の形見、それによつて菊治が夫人や文子を思ひ出す、あるひはもつと親しく触れるやうに思ふ品は、最高の物であつてほしいと、文子は考へてくれるのだらうか。

最高の名品こそ母の形見に、と一筋にねがふ文子の言葉は、菊治にも通じた。

「最高の名品こそ母の形見に」と娘の文子が願う一途な思いは、母を名品の茶器と重ね合わせるによつて揺るぎない姿を浮かび上がらせようとするものである。高浜虚子の「愛子抄」においては、かつて名妓といわれた母とその娘の愛子が舞を披露することによつて感動をさそうのであったが、『千羽鶴』においては志野の名品と太田母娘を重ね合わせる形で、ともに母娘の姿が象徴的な衣をまとうように描かれていると言えるのではないだらうか。

そうした象徴性を帯びて太田夫人と文子の姿が語られるとき、菊治が文子を見るまなざしのやわらかさが印象深い。

母の体から生れた子供に、母の体がわからないのは、なにか微妙なことのやうだが、母の体の形は微妙に娘へ移されてゐる。

玄関で文子に迎へられた時から、菊治がやはらかい感じを受けたのも、文子のやさしい円顔に、母の面影を見たせゐもあつた。

夫人が菊治に父の面影を見て、あやまちを犯したのだとすると、菊治が文子を母に似てゐると思ふのは、戦慄すべき呪縛のやうなものだが、菊治は素直に誘ひ寄せられるのだつた。

ここには、たとえば『源氏物語』に見られる「形代」の構想もあるかにかがわれるが、こうした親子二代にわたる愛恋の構想を繋ぐものとして、永遠性をもつ茶器が関連づけられたとも言えるであらうか。

以上見てきたように、川端の『千羽鶴』において、太田母娘が寄る辺ない境遇の中で暮らし、志野の茶碗や水差し

など茶道具の永遠性を通してその存在を縁どるあり方は、『千羽鶴』の連載開始の前年に川端が傾倒した高浜虚子の『虹』『愛居』等とその構想において一脈通ずるものがあるように想像されるのである。

次に、『千羽鶴』と同時期に連載が開始された『山の音』を見てゆこう。『山の音』の主人公尾形信吾はすでに六十歳を越えているが、息子の嫁菊子にひそやかな思慕の情を覚える。この信吾の菊子への思いはなかなか微妙なものがある。一方、菊子にしても、信吾が「菊子は修一に別れたら、お茶の師匠にでもならうかなんて、今日、友だちに会つて考へたんだらう？」と言つたのに対し、「別れても、お父さまのところにて、お茶でもしてゆきたいと思ひますわ。」と顔にあてがつた慈童の面の陰ではっきり答えるのである。このような信吾と菊子の間に流れる感情を恋愛感情と捉えてよいのか、庇護といたわりの情に繋がるものなのか、把握がむずかしいところがあり、『山の音』論の論点の一つと言つてもよいものである。この問題を考えるとき、やはり『山の音』連載開始の前年に川端が注目した虚子作品がクローズアップされてくるのではなからうか。とくに、先に見てきたように川端が執筆した「愛子抄」の「解説」肉筆原稿において、愛弟子である愛子を詠んだ虚子の句について、最初は「老大家の句としては驚くばかり熱烈であり艶麗である。」と記し、その後「熱烈」の語を「烈輝」と推敲したところには、虚子の若い女弟子への思いを川端がどう捉えていたかがうかがわれて興味深い。「熱烈」というと直接的な恋愛感情の高まりをあらわすようなニュアンスがあるが、「烈輝」とすることによって何か恋愛感情の枠にはとどまらないより大きな高い心で弟子を包もうとするような雰囲気があろうか。こうした老大家が哀切な境遇にある女弟子へ寄せる複雑微妙な心理というものを、作家川端は「愛子抄」から受け止めていたと思われ、それが『山の音』における信吾の菊子への心情と一脈通底するものがあるようにも想像されるのである。むろん、作者の川端自身に『山の音』執筆にあたって虚子の「愛子抄」が念頭にあつたというような発言は見あたらないわけだが、「愛子抄」の「解説」の執筆とそれほど時間的

に隔たっておらず、また俳句の師匠と弟子、舅と息子の嫁というそれぞれの枠組みの中で、恋愛感情とは言い切れない複雑微妙な感情が向けられている点に共通性が見出されると思われる。

なお、作中で尾形信吾は時折り俳句をひねったり俳句についての話題を持ち出している。「昔、田舎で、保子の姉さんにすすめられて、ちよつと、俳句をひねつたことがあつた」とも話しており、信吾の日常の中で、事象に対して俳句のもつ観照的な姿勢が所々にあらわれている。こうした主人公尾形信吾の事象に対する一種の間合いの取り方も、菊子への接し方と繋がっているように想像される。そして、その観照的姿勢は、物語を閉じるにあたって信州の紅葉のもとに菊子と妻保子の亡き姉の面影を重ね合わせ（二人の面影は似ている）、あたかも二人舞いのような形で定着させようとする意識へとつながってゆくであろう。以上見てきたように、『山の音』と虚子作品の間には、その人物構図や心理、さらに俳句につながる観照的態度において通底するものがあるように思われるのである。

最後に、『虹いくたび』について触れる。『虹いくたび』は、『千羽鶴』『山の音』の連載とほぼ同時期に『婦人生活』に連載された（昭和二十五年三月～二十六年四月）。この作品の人間模様は相当に複雑である。著名な建築家水原常男には、それぞれ母の異なる三人の娘がおり、それぞれの錯雑をはらむ出生や恋愛体験を軸に複雑な、多分に尋常ならざるプロットが京都を主要舞台に展開される。その冒頭部で、琵琶湖に虹がたつ場面が印象的に描かれ、その後作中に何度かこの作品のモチーフをなぞるように虹に言及されるのである。

冒頭部で琵琶湖の向こう岸に虹が立った時、列車に乗っていた麻子が、向かいの席にいた赤子連れの男性と話を交わす場面がある。そこで男は以前に北陸線で見た冬の虹について語る。

「もう米原が見えますが、米原からわかる北陸線——その時は、今とは逆に、金沢から米原へ出て、京都へ行くつたんですけれども、汽車からいくつも虹を見ました。北陸線は虹が多いんですね。それがみな小さくて、可愛

い虹なんですよ。トンネルを出ると、小山に小さい虹が立つてゐる、海が見えると、丘から浜に小さい虹がかかつてゐるといふ風でね。三四年前のことで、何月か忘れましたが、金沢は粉雪がちらついて寒かつたから、冬でしたね。」

その時も、この人は赤子を抱いた旅だつたらうかと、麻子は思つてみた。

しかし気がつくと、三四年前にこの子はまだ生れてゐない。

ここでは北陸の冬の虹が描かれているが、川端が「わが愛する文章」で取り上げた高浜虚子作品で描かれた虹も北陸の冬の虹である。むろん人物構図は『虹いくたび』と虚子作品とは異なっているが、一種の哀切な情調には通い合うものがあるようである。

また、虚子作品では、列車内で三国の方角に立つ虹を見て、愛子が「あの虹の橋を渡つて鎌倉へ行くことにしませう。」と虚子に言う場面があるが、虹が橋となつて遠い地を結ぶイメージが形成されている。この発想自体はそれほど珍しくはないだろうけれども、川端の『虹いくたび』にも類似の発想は見られる。列車内から琵琶湖に立つ虹を見た麻子は次のように思う。

虹を見つけて、麻子は湖水の向うの虹の方へ心を誘はれた。その虹の立つ国へ、生きてゆきたいやうだつた。また現実的に、その虹の立つあたりの向う岸へ、旅行してみたくなつた。

ここに見られる麻子の心象は、虚子作品とは微妙に構想を異にしたがらも、作中の女主人公（愛子・麻子）が虹をなかだちとして憧憬の地へと心惹かれてゆく点では一脈繋がるものがあると思われる。また、これは虹について語られたものではないのであるが、『虹いくたび』において麻子と夏二の会話の中で、「橋」のイメージについて語られるところがある。夏二が、「僕にはわからないんだが、死んだ兄と生きてゐる百子さんとのあひだに、今でも何か橋が

かけられるものなのか、またはかかつてゐるものなのか……。」と切り出し、さらに次のように言う。

「僕は向う岸のない橋のやうに思へるんですよ。生きてる者が橋をかけても、向う岸に支へがなくて、片一方は宙に浮いてしまふ。また、どこまで橋をのぼして行つても、向う岸にとどかない。」

ここには生者が死者に橋をかけようとしても「向う岸に支へがなくて、片一方は宙に浮いてしまふ」という想いはかなさが語られているが、こうした「橋」のはかなげなイメージはおのずから「虹」ともつながるものであり、虚子の「愛子抄」で死期の近い愛子が語った「あの虹の橋を渡つて鎌倉へ行くことにしませう。」という言葉の哀切さ、はかなさとも通じ合うものがあるであらう。

なお、やや時代はくだるが、川端の『古都』や『たんぽぽ』にも虹が素材として取り入れられている。『古都』では、「松のみどり」の章で秀男が北山の方角に虹が立ち消えてゆくのを眺めている。その後秀雄は苗子に帯を持参するが、苗子は「千重子さんの身代りの、帯どすな。あたしは、身代りは、もういやどす。」という。ここで描かれた虹のはかなさは秀男が苗子に千重子の面影を見ながら、しだいに苗子自身に惹かれてゆくという微妙な心理とびびき合っているように思われる。また、川端の遺作ともなった『たんぽぽ』では終わりの方で、女主人公の稲子が桃色の虹を幻視し、「虹に乗つてらつしやるわ、久野さん。」と言う場面がある。久野にはその虹は見えず、人体欠視症なる病を患う稲子の特異な愛情の形があらわれている場面と思われるが、ここで描かれる虹のイメージは虚子の「愛子抄」の虹のイメージと重なり合うものがある。『古都』『たんぽぽ』についてはここでは言及のみにとどめざるをえないが、機会を得て触れてみたいと思う。

以上、川端康成が心を寄せた高浜虚子作品（『虹』『愛居』『音楽は尚ほ続きをり』等）を視点として、その虹のイメージの取り入れ方や俳句への親近、母と娘の二人舞の構図、老大家が若い女弟子に向けたこまやかな心など、四点

ほどを取り上げ、川端康成作品との繋がりを考察した。

結

川端康成が太平洋戦争後の本格的な創作活動を開始する直前に、高浜虚子の『虹』『愛居』等を読み、文芸時評や「わが愛する文章」に取り上げて深い傾倒を示していることは事実である。とくに「わが愛する文章」に取り上げた際は、虚子が愛子という女性を書いた『虹』『愛居』『音楽は尚ほ続きをり』の三作品の総称として虚子にことわりなく「愛子抄」と名づけ、さらに「愛子の姿の鮮明なところ、虚子氏の思ひの高調のところを、これも私が作者にことわりなく抜萃してみた」ほどの心の寄せようであった。

これらの虚子への川端の傾倒は昭和二十三年になされたが、その翌年は周知のように、戦後の川端文学の代表作ともいわれる『千羽鶴』『山の音』の連載が開始された年である。この両作品にさらに一年後（昭和二十五年）に連載がはじまった『虹いくたび』も加えた三作品においては、本稿で見てきたように、母と娘の二人の姿が重なり合うイメージや、若い女性へ寄せる老い人のこまやかな情愛、作中への俳句の導入、虹の描写などにおいて、虚子作品と少なからず関連が見出されるようである。『千羽鶴』『山の音』『虹いくたび』が連載されていた昭和二十年代においては、前述の文芸時評や「わが愛する文章」のほか、『定本虚子全集』の推薦文や川端の自伝「独影自命」でも虚子に言及した文章があり、この時期の川端康成において俳人高浜虚子への親近がある程度持続されていたのではないかと想像される。また、川端が住まう鎌倉の長谷と虚子が住まう由比ヶ浜の地が隣接していたことも、親しみを覚えるゆえんの一つとしては考えられようか。そうした時期に連載がなされた『千羽鶴』『山の音』『虹いくたび』の諸篇の執筆過程において、ある程度川端が虚子を意識していたのではないかと推測も許されるのではなからうか。川端が

上記の作品を執筆するに際して虚子の『虹』『愛居』等から直接影響を受けたという述懐や証言は見出せないが、本稿で述べたような両者の作品のいくつかの類似点や執筆時期が近接し川端の文芸時評等でも論及されていた状況から推して、ある程度推測可能かと思われる。今後さらに、本稿で若干触れた『古都』や『たんぽぽ』をはじめ川端作品の動向をつぶさにたどり作品分析を行うなかで、川端が「愛子抄」と名づけた虚子作品をいかに意識し受容していたのか、その様相を明らかにしてみたいと考えている。

なお、昭和二十年以降の文壇の流れの中で、本稿で考察したような老人が若い女性に寄せる情愛のモチーフや母娘の関係が織りなす作品構図、また作中に俳句を取り入れた小説形式などがどのような位置を占めるかについても論及する必要があるかと思われる。とくに老人が若い女性に寄せる情愛のモチーフについては、川端が「愛子抄」の「解説」で「わが国では珍らしい、老大家が若い女性を描いた名作が生れた」と記していたこともあり、日本近代の小説史の中での位置づけも相応になされるべきであろう。課題として記し、機会を得て論及を試みたいと考えている。

注

- (1) 川端康成の著作の引用は、以下とくに注記したものを除き、『川端康成全集』(全三十七巻、昭和五十五年二月～五十九年五月、新潮社)による。
- (2) 川端は複数の虚子作品を合わせたものに「愛子抄」という新たな表題をつけているが、その本文は虚子作品の抜粋である。したがって、本稿で「愛子抄」というとき、その内容は虚子作品の本文そのものであり、抜粋、編集にのみ川端の意図が及んでいる。

- (3) 高浜虚子の著作の引用は、以下『定本高浜虚子全集』(全十六巻、昭和四十八年十一月～昭和五十年十一月、

毎日新聞社)による。

〈付記〉

本稿は、平成二十五年度科学研究費助成事業による研究「日本近代文学館他における川端康成・肉筆資料の調査研究」(基盤研究C、課題番号25370242、研究代表者・片山倫太郎、研究分担者・田村充正・田村嘉勝・福田淳子・山田吉郎、研究協力者・杵渕由香・佐藤翔哉・堀内京、平成二十五年四月より四年計画)の研究成果の一部である。川端康成「わが愛する文章 愛子抄」の「解説」肉筆原稿(茨木市立川端康成文学館所蔵)を本稿で取り上げるに際しては、公益財団法人川端康成記念会理事長川端香男里氏ならびに茨木市立川端康成文学館の了解を得た。ここに記し謝意を表します。